

[学術論文]

カント哲学前批判期の解明（その2）

Die Erklärung der frühen kritischen
Phase von Kantischer Philosophie, 2 Teil

森 哲 彦

Tetsuhiko Mori

Studies in Humanities and Cultures

No. 9

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 9号
2008年6月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN

JUNE 2008

[学術論文]

カント哲学前批判期の解明（その2）

Die Erklärung der frühen kritischen Phase von Kantischer Philosophie, 2 Teil

森 哲彦

von Tetsuhiko Mori

「我々が有徳と呼ぶ理性的行為者の感情、行為、性情を是認する規定を、我々は道徳的感情と名付ける」
(F.Hutcheson: 1725 (1986.S.5)).

「人間よ、人間的であれ。それがあなたがたの第一の義務である。あらゆる身分の人に対して、あらゆる年齢の人に対して、人間にとって無縁でないあらゆるものに対して、人間的であれ。あなたがたにとって人間愛のないところにどんな知恵があるのか」
(J.-J.Rousseau: 1762 (1950.p.43)).

要旨 カントは、1760年代前半の独断的、論理的形而上学期において、伝統的なドイツ形而上学に依存しつつも、真に自立した形而上学者の立場を表明する。続いて1760年代半ば以降の経験的、懐疑的形而上学期では、ドイツの伝統的哲学と関わりながらも、研究に社交的文明精神を導入することにより、人間学的観察と道徳的原則の探究を行うものとなる。このようなカントの新しい思想的「変化」は「カントにおける一つの革命」と評される。

本論で取り上げる著作『美と崇高の感情の観察』1764年においてカントは、当時ドイツで紹介されていたイギリス道徳哲学、とりわけハチスンの道徳感情論を取り上げ、伝統的な哲学者としてよりも観察者の眼をもって「美と崇高の感情」に現れる様々な諸相を、美学的、人間学的に分析する。だが文明化した社会の「多様性のただ中の統一性」を観察するイギリス道徳感情論にカントは満足せず、文明化した人間社会を批判するルソーの思想に出会い、新たな転向を迎えるものとなる。カントがルソーの思想を取り上げる著作は『美と崇高の感情の覚書』1765年である。この著作は、前著作『観察』の余白にカント自身によって書き込まれた種々の断片的な文章により構成されている。そこにおいてカントは、ルソーがいうように墮落した文明を批判し、単純で自足した自然にもどることを、提唱するのではなく、文明化した社会を人間、自然、自由、および意志の完全性により啓蒙し、新しい道徳的原則を、志向しようとするものである。

キーワード：道徳的感情 (moralisches Gefühl)、真の徳 (wahre Tugend)、人間性 (menschliche Natur)、自発性 (spontaneitas)、文明化した人間 (gesittete Menschen)、自由の状態 (Stand der Freiheit)

目次

I 序

II 自然科学期

III 独断的、論理的形而上学期（以上『人間文化研究』第7号）

IV 経験的、懐疑的形而上学期（本号）

IV 経験的、懐疑的形而上学期

1 序

カント (I.Kant) は、1760年代前半の独断的 (dogmatisch)、論理的形而上学期の著作として『神の存在論証の唯一の可能な証明根拠』（『神の存在証明』1763年、¹⁾ および『自然神学と道徳の原則の判明性に関する研究』（『判明性研究』懸賞論文）1764年²⁾ を刊行し、自立した形而上学者としての立場を表明している。続いて社会的 (gesellig) 精神に満ちた文明社会を経験的に分析する経験的、懐疑的 (skeptisch) 形而上学期の代表的著作として、1 『美と崇高の感情に関する観察』（『美と崇高の感情の観察』1764年、³⁾ 2 『美と崇高の感情に関する観察のための覚書』（『美と崇高の感情の覚書』1764-1765年、⁴⁾ 3 『1765-1766年冬学期講義公告』（『講義公告』1765年、⁵⁾ および4 『形而上学の夢によって解明された視霊者の夢』（『視霊者の夢』1766年⁶⁾ が挙げられ、人間学的考察が行われる。本論では『美と崇高の感情の観察』と『美と崇高の感情の覚書』の内容と双方の相違の意味について発展史的 (entwicklungsgeschichtlich) 解釈⁷⁾ を行うものである。

2 『美と崇高の感情の観察』1764年

1 カントは、本書において「美と崇高」という二種類の感情について、対象としての自然の区分、人間一般における特性、両性の相互関係における区別、および国民的性格を考察している。これら諸問題についてカントは「哲学者としてよりも観察者の眼で眺めたい」（II207）とする。その際、カントのいう「観察者の眼」とは、次のように考えられる。カントは、すでにI自然科学期において自然現象や自然法則の哲学的方法やその認識方法についての形而上学の考察を行っているが、道徳については、II独断的、論理的形而上学期での『判明性研究』の第四考察で「いまだ必要なすべての明証性を持ちえない」（II298）としている。そして道徳、とりわけ道徳的原則については期は今だ熟さず、ここでは「哲学者としてよりも観察者」として考察すると表明したと考えられる。そう考えるとメンツァー (P.Menzer) がいうように「本来この本書の中心

は道徳哲学が書いてある」⁸⁾ とするのではなく、むしろシュムッカー (J.Schmucker) がいうように「観察の視点は、実際には美学的 (ästhetisch) であって、道徳哲学的ではない」⁹⁾ といえよう。従って観察者カントは、美学的であると同時に人間学的視点に立っているといえよう。そして I 自然科学期や II 独断的、論理的形而上学期で哲学者カントにより分析された合理的、論理的で堅苦しい叙述に対し、観察者カントの眼で見るものは、本書に見られるように、社交的内容のみでなく、文章においても軽妙で華やかであり、大きい変化を来している。

ではカントは、感情の観察については、誰の影響の下にあったのか。シュムッカーによれば「この論文においては、ルソー (J.-J.Rousseau) の影響の受入れは疑わしく」¹⁰⁾ むしろ「ハチスン (F.Hutcheson) の影響のとどく範囲にある」¹⁰⁾ とする。事実すでにカントは『判明性研究』において「ハチスンその他は、道徳的感情という名の下に、優れた所見を提供している」(II300) と評価していることから、イギリス道徳感情論の影響を受けていると考えられる。さらに本書中でカントは、美と崇高についてクロムウエル (O.Cromwell)、崇高についてはミルトン (J.Milton)、国民的性格ではヒューム (D.Hume) というイギリス経験論者達¹¹⁾ の名を挙げていることからその影響が伺えるところである。

2 カントは、第一章「対象としての自然の区分」(II207ff) を「美と崇高の感情という二種類」にする。まず崇高の表現として「雪におおわれた頂上が雲の上にそびえる山の眺め、荒狂うあらしの叙述、またはミルトンの地獄の描写などは、喜びを引き起こすが、恐怖を伴う」(II208) とする。そしてその印象を得んがために人は「崇高の感情をもたなければならない」(II208) ののである。次に美について「花の咲き誇る牧草地、蛇行する小川を伴い、放牧の群におおわれた谷間の眺望、極楽の叙述やホメロス (Homer) によるヴィーナスの帯の描写も快適な感覚を引き起こすが、この方は朗らかで笑いかける」(II208) とする。そして双方のうち「崇高なものは感動させ、美しいものは興奮させる」(II209)。そのうち崇高はさらに三種類に区分される。第一の崇高は「戦慄もしくは憂鬱をとまなう」、「恐怖的崇高 (Schreckhaft-Erhaben)」(II209)、第二は「落ち着いた賛嘆による」、「高貴 (Edel)」(II209)、第三は「崇高な地の上に広がっている美を伴う」、「豪華 (Prächtige)」(II209) である。そしてさらに崇高と美の双方について「崇高は常に大きくなくてはならないが、美は小さくてもよい、崇高は単純でなくてはならないが、美は磨かれ、飾られなくてはならない」(II210)。そしてこのような自然に対する崇高と美の区分が、人間一般の徳の諸相の区分に適用されるものとなる。

3 第二章「崇高の徳と美の徳の特性」(II211ff) の区分について、カントによれば「崇高な特性は尊敬 (Hochachtung) を、美的な特性は愛をふきこむ」(II211)。従って「友情は主として崇高の相を、異性への愛は美の相をそなえている」(II211)。そして「悲劇と喜劇の区分」

(II212) では「悲劇には崇高の感情が、喜劇には美の感情が動かされる」(II212)。では徳の本質的特性の区分は何によるか。それは「道徳的特性」(II215)である。つまり「真の徳 (wahre Tugend) のみが崇高であり」(II215)、「愛すべくまた美的」(II215)な徳は「高貴」(II215)とみなされる。そして「同情や迎合性」(II217)による徳は「美的で愛すべきではあるが、いまだ真の徳の基礎ではなく」(II216)それらは「徳の直接的根拠ではない」(II217)ので「養子格 (縁組 adoptierte) の徳と名づけ」(II217)られ、崇高の徳に奉仕するものである。つまり「同情や迎合性」による美の徳の在り方は「徳の一般的規則に反する」(II215)ものなのである。このような美の徳に対し「真の徳は、原則にのみ接木され得るし、原則が一般的であればあるほど、徳はそれだけ一層崇高に、また高貴となる」(II217)のである。そして「これらの原則は、思弁的規則でなく、あらゆる人間の内に生きていて、同情や迎合性の特殊な根拠に対するよりも、ずっと広範囲におよぶ感情の意識」(II217)なのである。その徳は「人類の一般的好意 (allgemeine Wohlgeogenheit gegen das menschliche Geschlecht)」(II217)である。そしてそれは「人間性の美と尊厳の感情 (Gefühl von der Schönheit und der Würde der menschlichen Natur)」(II217)として総括される。つまり前者の人間性の美の感情が「一般的情愛の根拠」(II217)であり、後者の人間性の尊厳の感情は「一般的尊厳の根拠」(II217)である。これらの基本的な「感情」が「特殊な傾向性」から「拡大された傾向性 (erweiterte Neigung)」(II217)に適用されて初めて「徳の美である高貴な作法を成就しうる」(II217)ものとなる。このような徳の諸相の分析について、原則からの「真の徳」と原則に基づかない「養子格の徳」の外に、同じく原則に基づかない「虚飾の徳」(II218)があり、それは「名誉への感情」(II218)といわれるもので、原則に基づかない「徳の類似なもの」(II218)とされている。

カントは「崇高と美の感情」(II220)をこのような三つの徳の諸相、つまり「真の徳」、「養子格の徳」および「虚飾の徳」に基づいて、人間の気質を分析する。カントは人間の気質の基本形として、憂鬱質、多血質、胆汁質、および粘液質の四つ (II219-220)を挙げている。それら気質のうち最も重視されるのが、憂鬱質である。カントによれば「憂鬱質に属する人は、特に崇高に対する感情を持っている。彼は美に対する感情も持っているが...彼は堅固である。そのため彼は彼の感情を原則の下に従える」(II220)。「多血質の人は、美に対する支配的な感情を持っている...彼の道徳的感情 (moralisches Gefühl) は、美的であるが、原則を欠いている」し「彼は変化を愛する」(II222)。「胆汁質の人は、彼自身の価値と彼の物や行為を眼に入る体裁や見せかけから観察する...彼は多血質の者よりもはるかに原則に従って行為する。しかしその原則は、徳の原則でなく、名誉の原則」(II223)なのである。「粘液質」には「崇高や美の成分」(II224)は特に関係することがないので、カントは考察していない。そして最後にカントは、崇高と美の感情による三つの徳の諸相を全体として「豪華な表現の幅の絵画に合一され、そこでは大きな多様性 (Mannigfaltigkeit) のただ中に統一性 (Einheit) が輝き出て、そして道徳性の全体 (Ganze

der moralischen Natur) が美と尊厳とをそれ自身において示している」(II227) と考察するのである。

4 第三章「崇高と美の区分についての両性の相互関係」(II228ff)における徳の諸相の相違について、カントは「女性の徳は、美しい徳である。男性の徳は高貴な徳であるべきである」(II231)とする。しかしその際、両性の「どちらが優れているか」(II242)が問題ではなく「最も重要なことは、男性が男として、女性が女としてより完全になること」(II242)である。なぜなら「自然の意志に反してなされることは、常に甚だ劣悪になされる」(II242)からである。しかしカントが両性の徳の諸相の相違を分析するとはいえ、当然この事態は「人間性の全体」の徳が「偉大な自然の計画に属する限り」(II227)においてである。第四章「崇高と美の感情についての国民的性格」(II249ff)の区別では、カントは「美の感情においてはイギリス人とフランス人が、崇高の感情ではドイツ人、イギリス人、およびスペイン人が、最も優れている」(II243)とする。そのうち「ドイツ人は崇高の感情においてイギリス人に劣り、美の感情ではフランス人に劣るとしても、ドイツ人は双方の感情を結合している限り、両国民を凌駕する」(II248)と評している。

さて本書『美と崇高の感情の観察』の内容は、シュムッカーがいうように決して「道徳哲学的ではなく」¹²⁾ イギリス道徳感情論の影響を受けたものであるといえよう。一方、フランス人の道徳的感情についてカントによれば「フランス人は道徳的美に対して優れた感情を有している」(II246)と高く評価するので、次にルソーの影響について見ておこう。カントがルソーの名を挙げている箇所は、第四章の女性と子供の類似関係を述べた所(II247Anm)¹³⁾だけである。ただ本書第三章、両性の相互関係の論述には『エミール』¹⁴⁾の内容と一致と思われる部分が数箇所(II229、230)¹⁵⁾見られる。しかしこの事実からカントがルソーの道徳哲学に傾倒していたと見るのは早計であり、シュムッカーがいうように、本書において思想家としての「ルソーの影響の受け入れは疑わしい」と見るべきであろう。カントがルソーの思想を批判、検討し、その影響を受け入れるのは、次の著作『美と崇高の感情の覚書』においてである。

3 『美と崇高の感情の覚書』1764-1765年

1 1763年秋から1764年初めにかけての時期に¹⁶⁾、カントが初めてルソーの1762年著作『エミール』を読んだ時、彼は感激して「数日間、通常の散歩を取り止めた程」¹⁷⁾とされている。カントはその感激を「私はルソーを表現の美しさが、私をもはや全く妨げとならなくなるまで読まなくてはならない。その時初めて私は彼を理性(Vernunft)をもって研究することができる」(XX30)とする。シュムッカーはこのカントによる『エミール』の読書を「カントにおける一つ

の革命」¹⁸⁾、「変化 (Wandlung)」¹⁹⁾ と呼ぶように、正しくカントによる「ルソーの影響の受入れ」といってよいであろう。そしてこの「一つの革命」の意味は、今一つの革命と対比されよう。すなわちその革命とは、ニュートン (I.Newton) が秩序と規則性としての自然の法則を見出したことに匹敵するものである。つまりこれをカントは「神はニュートンとルソーにより義とされる」(XX59) とし、ルソーをニュートンと並べて高く評価する。カントによれば「ニュートンは、彼以前には無秩序と乱雑な多様性しか見出せなかったところに、秩序と規則性が偉大な単純さに結びついているのを初めて見出した....ルソーは人間の様々な仮の姿の中に、深く隠された人間性と隠された法則 (Gesetz) を初めて発見した。この法則を求めたルソーの観察により摂理は義とされる」(XX58-59) のである。しかしカントのこのような思想が論述されるのは、カントが『エミール』を読んだ時以降の1765年『美と崇高の感情の覚書』においてである。

2 カントは、ルソーへのこの傾倒により、学問観について、知識や認識の学から、人間の学の優越性への変化を示すのである。この変化についてカントの次の告白は特に有名である。カントによれば「私自身は、好んで一人の探究者 (Forscher) となった者である。私は認識 (Erkenntnis) に対する非常な渴望と、認識においてさらに進みたいという貪欲な不安 (Unruhe) と、またあらゆる認識の獲得に対する満足をも感じる。このことだけが人類の栄光となるであろうと私が信じていた時期があった。そして私は何も知らない民衆を軽蔑していた。ルソーが私の誤りを正してくれた。この眩惑的な優越感は消滅し、私は人間を尊敬することを学ぶ。そして私はこのような考察が他のすべての人々に人間性の権利を回復するという価値を与えるということ信じなかったとすれば、私は自分を平凡な労働者よりもはるかに役に立たない者とみなすべきである」(XX44) とする。ここにカントは自ら「信じていた時期」である独断的、論理的形而上学期の学問観に対する変化と転向を告白する。つまりカントが信じていた学問観は、対象に対する認識の獲得であり、その学問の行為が「人類の栄光」と考え、そうしない「民衆を軽蔑」していたのである。このような人間蔑視の「誤りをルソーが正してくれた」のである。

3 カントはルソーからこのように「人間を尊敬すること」(XX44) を学び、認識の学から人間中心の学へ転向する。その際、カントは人間の学としての「人間」を具体的、現実的にどのように規定するか。それはいわゆる自然の人間と文明化した人間との問題である。カントによれば、自然の人間とは「自然的、必然的なものによる以外の欲望をもたず、またそれより高度の欲望をもたない人間は、自然の人間 (Mensch der Natur)」(XX6) と呼ばれる。そして「自然の単純さ (Einfalt) と自然の自足 (Genügsamkeit) とが認められる人間が、自然の人間」(XX6) である。従って「自然状態においては人間は徳をもたずに善であり、学問 (Wissenschaft) がなくても理性的である」(XX11)。ゆえに「自然の単純さの中にある限り、すべての身分の中での学者

（Gelehrte）ほど不要な者はない」（XX10）のである。

またカントによれば自然の人間こそが自由な人間なのである。つまり自然の単純さの中にある「自然の人間は、必要とするものがほとんどなく....人間は物がなくてすませる限りにおいて、人間は完全である」（XX146）。しかしたとえ「人間はどのような状態におかれようとも、多くの外的な事物に左右される」（XX91）ものである。つまり「人間は自然の支配者（Meister der Natur）ではないので、自然の強制に従わなければならない」（XX91）。つまりそうすることは「神の意志にかなうこと」（XX68）である。しかしながら人間にとり「不自然なことは、人間の他の人間の意志への従属である」（XX92）。そして人間が「神の意志に服従する」（XX66）のではなく「他の人間の意志に従属すること」（XX88）は「奴隷制（Sklaverei）」（XX88）に意志をゆだねるものとなる。そして他の人間への従属により人間は不自由な人間となる。カントによればこのように「依存する人間は、もはや人間ではない。彼はこの人間の地位を失った」（XX94）のである。しかし本来「人間は自発性（spontaneitas）を持っている」（XX66）。ここにカントは自然の強制の下において、人間の自発性や自立性のうちに人間の自由、つまり自由人を見ているのである。

このような自然の人間についての考察について、カントは「ルソーは〔人間を〕総合的に取り扱い、自然の人間から出発する」（XX14）とする。これに対しカントによれば「私は〔人間を〕分析的に取り扱い、文明化した人間（gesittete Menschen）から始める」（XX14）とする。つまりルソーは、自然の単純な人間の概念から文明化した人間社会を批判する。これに対しカントは、ルソーのいう自然の人間の概念を継承しつつも「自然は決して人間を市民に創造するものではない」（XX31）ので、文明化した人間社会を認識し、分析するために、独自に自然の人間の自発性や自由な人間問題の視点に注目するのである。

4 では文明化した社会における人間、そして自由とは何か。つまり文明化した社会における人間としてのわれわれの使命は、どのように規定されうるのか。カントによれば「人間の最大の要務は、どのようにして創造における自己の地位をいかに全うするかを知り、また人間であるためには、人はどのようなものでなければならないかを正しく理解するかを知る」（XX41）ことである。つまり「自然の文明化した人間のままであるために」（XX31）はどのようにでなければならないかということである。カントによれば「自然の人間」に対して「文明化した人間」の特質を「虚栄（Eitelkeit）」（XX39）と「贅沢（Üppigkeit）」（XX6）であるとする。また欲望についてカントによれば「自然本性によって人間に必要な欲望は自然な欲望である」（XX6）し「自然の単純さと自足が認められる人間は自然の人間である」（XX6）。これに対し「文明化した状態においては、非常に多くの不自然な欲望が見られる」（XX11）し「本性上自然によって必要である以上のものを欲望するようになった人間は贅沢である」（XX6）。そして「自然状態においては....学問なくして理性的であり」（XX11）「学者ほど役に立たないものはない」（XX10）のに対し、文明化し

た社会においては「享樂においても知識においても非常に多くの贅沢が生じるので、学問が発生する」(XX11)のである。「学者はすべてが彼等のためにあると信じている」(XX38)ので「人倫における弱さ、怠惰と虚栄が学問をもたらす」(XX43)。従って「学問は大部分の人々には虚栄の道具として役立つにすぎない」(XX39)ものとなる。このような文明化した社会において「もし人間に必要な学問が存在するとするなら、それは創造において人間に示されている地位を適切に全うするように教える学問であり、また人間であるためには、人はどのようなものでなければならぬかを学ぶ学問である」(XX45)。それゆえ学としての「形而上学は人間理性の限界 (Schranke der Menschlichen Vernunft) についての学問である」(XX181)²⁰⁾。そして「形而上学は、害になるかも知れない仮象を廃する点で有益である」(XX181)。従って「人間に必要な学問」(XX45)は「自然すなわち自由の状態 (Stand der Freiheit) の中に見出され」(XX56)、虚偽の学問は「不自然」つまり不自由な状態にもたらされるものとなる。これに対し「人間の唯一の自然的な必然的善は、他人の意志に対する関係では平等 (自由 (Freiheit)) である」(XX165)。つまり自然は自由であり、善を意識し、不自然は不自由であり、悪を意味するものとなろう。

4 結

『美と崇高の感情の観察』に見られるカントの道徳的感情の分析はイギリス道徳感情論の影響の下に「人間性の美と尊厳の感情」(II217)として総括されている。その後、ルソーの影響を受け入れる『美と崇高の感情の覚書』では、カントの道徳的特性はどのように変化するか。まずカントは『美と崇高の感情の観察』では、道徳的感情を「美と崇高の感情」が「拡大された傾向性」に適用されて初めて成就しうる、としている。これに対し『美と崇高の感情の覚書』において「傾向性をはなはだしく拡大することは幸福には全く役立たない」(XX45)とする。またカントは、ルソーについて「彼の主目的は....自由な人間を作ることである」(XX167)とし、ルソーからカントは「人間を尊敬することを学ぶ」(XX44)とした。カントがルソーから学んだ根本は、人間の「自由」という道徳的原則であるといえよう。従ってカントは「自己または他人の感情を動かすため....私はその支点を自然すなわち自由の状態の中に見出す」(XX56)とする。カントは道徳的特性を傾向性拡大化の道徳的感情から人間の「自由の状態」へと変化させる。さらにカントは、この自由の概念を人間の意志に規定させることにより、明確化しようとする。すなわち「自由な意志は、その自己の完全性に依拠するすべてを欲する場合、それ自身で美であり、それが同時にすべての人の完全性を欲する場合、全面的に美である」(XX138)。そして「美を欲する根拠は、全く道徳的である」(XX138)とする。しかも「自由な選択意志にすべてを従属させることが最大の完全性である」。この自由と意志の規定から、カントは、道徳的感情を「美と尊厳の感情」(II217)から「意志の完全性の感情」(XX137)へと変化させる。つまりは人間の「自由の

状態」を規定する「意志の完全性」がカントのいう新しい道徳的原則となるのである。

（未完）

註

カントの著作からの引用は、アカデミー版カント全集に基づき、巻数をローマ数字、原著ページ数をアラビア数字にて本文中に（ ）で示すものとする。

- 1) Kant, Immanuel: *Der einzig mögliche Beweisgrund zu einer Demonstration des Daseins Gottes*, 1763. in: *Kant's gesammelte Schriften*. Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften. Bd. II, Berlin 1905/1912. カント・山下正男訳「神の現存在の論証（1763年）」『カント全集』第二巻所収、理想社、1965年。カント・福谷茂訳「神の存在の唯一可能な証明根拠」『カント全集』3所収、前批判期論集Ⅲ、岩波書店、2001年。
- 2) Kant, I.: *Untersuchung über die Deutlichkeit der Grundsätze der natürlichen Theologie und der Moral*, 1764. in: *Kant's gesammelte Schriften*. Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften. Bd. II, Berlin und Leipzig 1912. カント・川戸好武訳「自然神学と道徳の原理の判明性（1764年）」『カント全集』第三巻所収、理想社、1965年。カント・植村恒一郎訳「自然神学と道徳の原理の判明性」『カント全集』3所収、前批判期論集Ⅲ、岩波書店、2001年。
- 3) Kant, I.: *Beobachtungen über das Gefühl des Schönen und Erhabenen*, 1764. in: *Kant's gesammelte Schriften*. Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften. Bd. II, Berlin 1912. カント・川戸好武訳「美と崇高の感情に関する考察（1764年）」『カント全集』第三巻所収、理想社、1965年。カント・久保光志訳「美と崇高の感情にかんする観察」『カント全集』2所収、前批判期論集Ⅱ、岩波書店、2000年。
- 4) Kant, I.: *Bemerkungen zu den Beobachtungen über das Gefühl des Schönen und Erhabenen*, 1764-1765. in: *Kant's gesammelte Schriften*. Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften. Bd. XX, Berlin 1942. カント・尾高達雄訳『美と崇高の感情に関する考察』覚え書き『カント全集』第十六巻所収、理想社、1966年。カント・久保光志訳『美と崇高の感情にかんする観察』への覚え書き『カント全集』18所収、岩波書店、2002年。
- 5) Kant, I.: *Nachricht von der Winrichtung seiner Vorlesungen in dem Winterhalbjahre von 1765-1766*, 1765. in: *Kant's gesammelte Schriften*. Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften. Bd. II, Berlin 1912. カント・川戸好武訳「1765-1766年冬学期講義計画、公告」『カント全集』第三巻所収、理想社、1965年。カント・田山令史訳「1765-1766年冬学期講義計画、公告」『カント全集』3所収、前批判期論集Ⅲ、岩波書店、2001年。
- 6) Kant, I.: *Träume eines Geistersehers, erläutert durch Träume Metaphysik*, 1766. in: *Kant's gesammelte Schriften*. Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften. Bd. II, Berlin 1912. カント・川戸好武訳「視霊者の夢（1766年）」『カント全集』第三巻所収、理想社、1965年。カント・植村恒一郎訳「視霊者の夢」『カント全集』3所収、前批判期論集Ⅲ、岩波書店、2001年。
- 7) 発展史的解釈とは、ディルタイ（W.Dilthey）のいう歴史的世界観、歴史的理性批判を指す。すなわちディルタイによれば「歴史的運動の歴史を叙述しようと試みてきた」、「私は、歴史的意義の性質と制約を探究すること——つまり歴史的理性批判——を企てた」、「歴史的世界観は、自然科学や哲学がまだ断ち切っていない最後の鎖から、人間精神を解放する」（Dilthey, Wilhelm: *Gesammelte Schriften*. Bd. V, 1924. S.9.）ものである。そして「精神科学の進歩は、自然的体系を介して、発展史的見解〔解釈〕に到達する」（Dilthey, W.: *Gesammelte Schriften*. Bd. I, 1883. 8 Aufl., 1923. S.382.）。この精神科学の進歩の方法と関連づけて、ディルタイはアカデミー版カント全集の第一巻に序文（1902年7月付）を寄稿して「偉大な思想家

の発展史〔的解釈〕は、彼等の体系を照し出し、人間精神の歴史の理解にとって不可欠の基礎である（Ⅰ、Ⅷ）とする。つまり発展史的解釈とは「この発展が遂行されてゆく状態は過去にはまだ呈示されえなかつたものの創造であり、新しい価値の明示である」（Dilthey, W.: Bd. V, S.218）と考えられている。

- 8) Menzer, Paul: Die Entwicklung der Kantischen Ethik in der Jahren 1760 bis 1785. in: *Kant-Studien*, Bd. II, 1898. S.308.
- 9) Schmucker, Josef: *Die Ursprünge der Ethik Kants in seiner vorkritischen Schriften und Reflektionen*, Meisenhienam Glan: Auton Hain, 1961. S.104. (abgek.Kant).
- 10) Ebd., S.128.
- 11) なかでもヒュームの警告が、1750年代から1760年代前半のいわゆる「独断のまどろみ（dogmatischer Schlummer）」(IV260,338)を破り、カントに「思弁的哲学の領域における研究に全く異なった方向を与えた」(IV260)とすることは、確定的意味を持つものとなる。
Kant, I.: *Prolegomena zu einer jeden künftiger Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können*, 1783. in : *Kant's gesammelte Schriften*. Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften. Bd.IV, Berlin 1911. カント・原佑・湯本和雄訳「プロレゴメナ」『カント全集』第6巻所収、理想社、1973年。カント・久呉高之訳「プロレゴメナ」『カント全集』6所収、岩波書店、2006年。
- 12) Schumucker, J.: Kant, S.104.
- 13) 女性と子供の類似関係として、カントは「女性は決して大きな子供以上のものにならない」（II247Anm.）とする。
- 14) Rousseau, Jean-Jacques: *Émile ou de l'éducation*, 1762. ルソー・今野一雄訳『エミール』上中下、岩波文庫、岩波書店、1962年、1963年、1964年。
- 15) 両性の相互関係について、ルソーの指摘とカントの叙述が一致すると思われる部分として、例えば次の点が挙げられる。ルソーが「女の子供でも、身を着飾ることを好む」（今野訳『エミール』下、22頁）とし、カントは「女性はすでに子供の頃に、装う事を好み、着飾った時、喜びを感じる」（II229）とする。またルソーが「女性の考察は、すべて男性についての研究であり、女性は観察し、男性は推論する」（今野訳『エミール』下、68-69頁）とし、カントは「女性の学問の内容は....男性である。女性の哲学は、推論することではなく、感覚することである」（II230）とする。
- 16) Schmucker, J.: Kant, S. 128-142.
- 17) Borwski, Ludwig Ernst; Jachmann, Reinhold Bernhard und Wasianski, Ehregott Andreas Christoph: *Immanuel Kant, sein Lehre in Darstellungen von Zeitgenossen*, 1968. Erster Teil, S.79.
- 18) Schmucker, J.: Kant, S.174.
- 19) Ebd., S.201.
- 20) この「人間理性の限界」という言明は、1766年著作『視霊者の夢』においても、つまり「形而上学は、人間理性の限界（Grenze der menschlichen Vernunft）についての学問である」（II368）として、カント形而上学の構想が表明されている。

参考文献

- Baumgarten, Alexander Gottlieb: *Ästhetik* (1750/58); Übersetzt, mit einer Einführung Anmerkungen und Registem, Hrsg. von Dagmar Mirback, Teil 1, Teil 2. Felix Meiner Verlag, 2007. (Philosophische Bibliothek; Bd. 572a-b). バウムガルテン・松尾大訳『美学』玉川出版部、1987年。
- Bollnow, Otto Friedrich: *Dilthey—Eine Einführung in seine Philosophie*, Leipzig und Berlin 1936. ボルノー・麻生建訳『ディルタイ——その哲学への案内』未来社刊、1977年。

- Burke, Edmund: *A Philosophical Inquiry into the Origin of Our Ideas on the Sublime and Beautiful*, 1756. ed. by J. T. Boulton, London, 1958. パーク・中野好之訳『崇高と美の観念の起源』みすず書房、1996年。
- Cassiere, Ernst: *Kants Leben und Lehre*, Verlag bei Bruno Cassiere, Berlin, 1. Aufl. 1918., 1921. E. カッシーラー・門脇卓爾・高橋昭二・浜田義文監修『カントの生涯と学説』みすず書房、1986年。
- Dilthey, Wilhelm: *Einleitung in die Geisteswissenschaften, Versuch einer Grundlegung für das Studium der Gesellschaft und der Geschichte*, Bd. I, Leipzig, Verlag von Dunker und Humblot, 1883. XX, 519p. in: Wilhelm Dilthey: *Gesammelte Schriften*, Bd. I, Hrsg. von Bernhard Groethuysen, 1. Aufl. 1923. デイルタイ・山本英一・上田武訳『精神科学序説』上下巻、以文社、1979年、1981年。牧野英二編集・校閲・共訳「精神科学序説 I」『デイルタイ全集』第 I 巻、法政大学出版局、2006年。
- Dilthey, W.: *Die geistige Welt, Einleitung in die Philosophie des Lebens*, Erste Hälfte: Abhandlungen zur Grundlegung der Geisteswissenschaften CXVII, 442p. in: Wilhelm Dilthey: *Gesammelte Schriften*, Bd.V, Hrsg. von Georg Misch, 1. Aufl. 1924.
- 浜田義文『カント倫理学の成立』勁草書房、1981年。
- Hume, David: *An Enquiries concerning Human Understanding and concerning the Principles of Morals*, 1748. ed. by L.A. Selby-Bigge, Oxford/Clarendon Press, 1951. 3, ed. 1975. ヒューム・斎藤繁雄・一ノ瀬正樹訳『人間知性研究』法政大学出版局、2004年。
- Hutcheson, Francis: *An Inquiry into the Original of our Ideas of Beauty and Virtue*, 1725; *Eine Untersuchung über den Ursprung unserer Ideen von Schönheit und Tugend: über moralisch Gutes und Schlechtes*/Francis Hutcheson; übersetzt und mit einer Einleitung Hrsg. von Wolfgang Leinhold: Felix Meiner Verlag, Hamburg 1986. (Philosophische Bibliothek; Bd.364). ハチスン・山田英彦訳『美と徳の観念の起源』玉川出版部、1983年。
- Kant, I.: *Kritik der Urteilskraft*, 1790. in: *Kant's gesammelte Schriften*. Hrsg. von Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Bd.V, Berlin 1913. カント・原佑訳「判断力批判」『カント全集』第八巻、理想社、1965年。カント・牧野英二訳「判断力批判」上下『カント全集』8, 9, 岩波書店、1999年、2000年。
- Milton, John: *Paradise Lost*, 1667. in: *the work of John Milton*, volume II, part I、II、New York, Columbia Uni. Press, 1931. ミルトン・平井正穂訳『失楽園』全2冊、岩波文庫、岩波書店、1981年。
- Rousseau, Jean-Jacques: *Émile ou de l'éducation*, 1762. *Emile*/by Jean-Jacques Rousseau; translated by Barbara Foxtey. J.M.Dent & Sons, 1950. (Everymann's library;essays & belles-letters; no.518). ルソー・今野一雄訳『エミール』上中下、岩波文庫、岩波書店、1962年、1963年、1964年。
- 坂部恵『理性の不安』勁草書房、1976年
- Schultz, Uwe: *Immanuel Kant*, in: rowohlt monographien, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg 1965. シュルツ・坂部恵訳『カント』（ロロロ伝記叢書）理想社、1982年。
- 高橋昭二『弁証論』創文社、1969年。
- Vorländer, Karl: *Immanuel Kant, Der Mann und das Werk*, Leipzig 1924.
- 森哲彦「カント哲学前批判期の解明」(名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』第7号) 2007年6月。